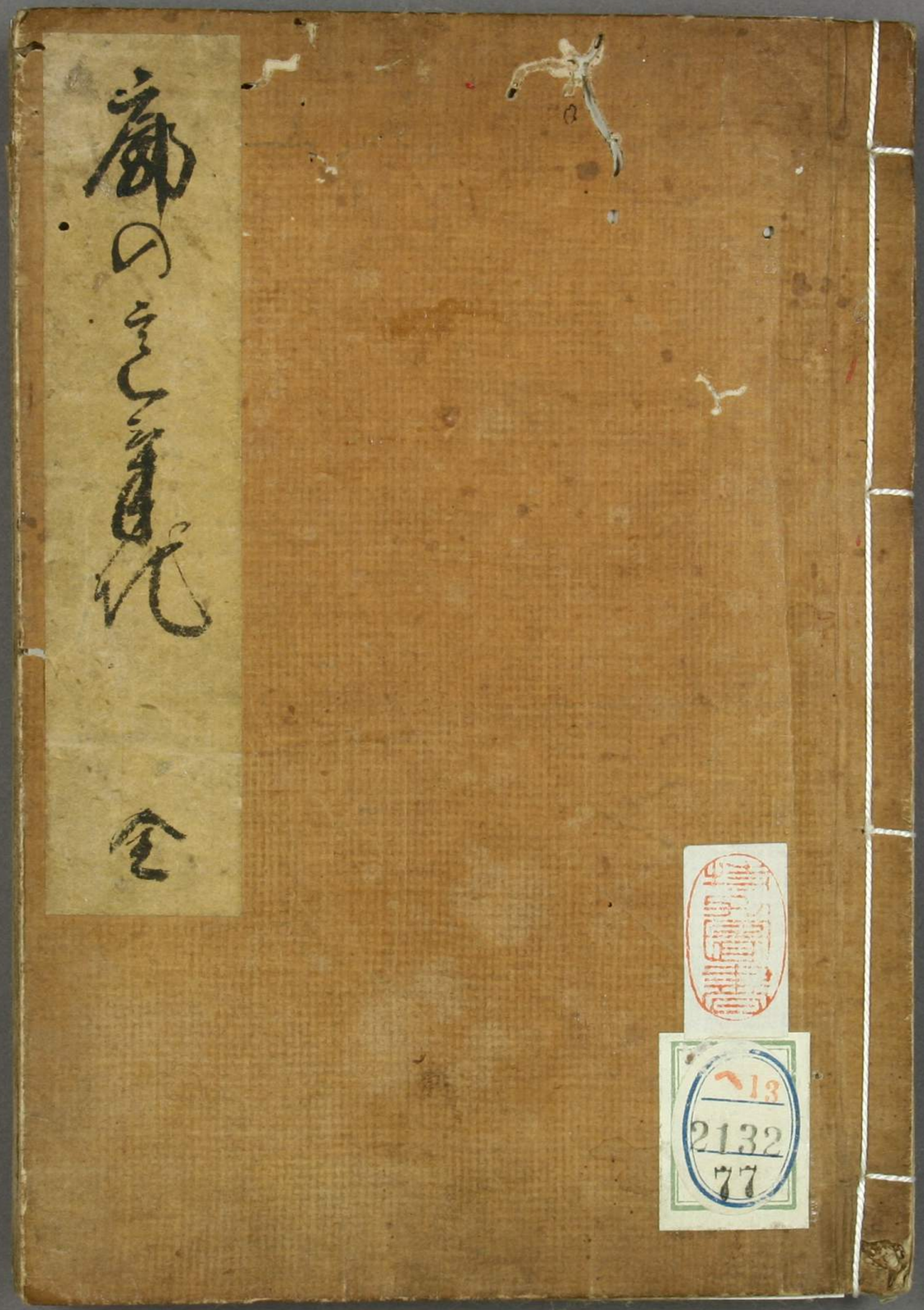
13
2132
77

77
2132
77

△
山津

扉(とびら)そこまで忙(せわ)しき
ぜんしゃ喜三(きさん)二人(ふたり)曰(いわく)旅(たび)の
空(そら)寝(ね)あり
を知(しり)て寝(ね)ざるは
幸(さいわい)疲(つかれ)なり
乃(すなわち)其(その)通(とおり)

饗庭文庫

齋藤文庫

偏ニ其ノ事ヲ記シ置ク而已ニ非ス
紙ヲ以テ遠ク鬼神ニ通シ
霧ヲ穿チ波ヲ穿チ
千里ヲ一日ニ返ス今ノ世ノ
ヲ見ル如ク今ヲ古ニ
序

況ンヤ其ノ事情ヲ具ニ
熟察セバ前賢ノ
残セル文ヲ以テ
得ヲ用ユル

後家の方へ
尺てられの
きく依
三ちまん後家
おやを

ちゃのこや
甲三郎
娘おきく

客伊三郎
おるよが姉
公兵衛の

妹おみよ

廓意氣地凡例細目

第一回ハ倡妓の序を
仁者のつまらべ列大通
そこ味をしるあり
第二回ハ作意のこゝを
物を殊し言を殊して
をこもの詞妙を
第三回ハ實情を旅して
第四回ハそぐて人情
務をのる矢の矢
第五回ハ通人化して
見そうくるの一條
着し筆ハ周て
陳まを記ハ筆
和るの男粋ハ
あくをものうを
事あらべ撰ハ

維時享和二歳
壬戌孟陬吉辰
十返舎一九識

[illegible]
[illegible]
[illegible]

しんぞこをめぐってるところも。
あちこち行ってるのが時々ゐやゐやあるう 版 をふく
さんのがもうとなりの 肉 ドレく トやひつの 雲 の版がけ
てるっア。結ぶどころ 消 ゐしてまげやせよ 老 をぐみえて
よってせ。ひげをやアどうくろへどよせ。俗人い
くるやアーめ。ネトそれもきっぱくそ。ゐろくうく
かりく 子ども せんうどうへア月 老 ちて
やうゐーいが。ぷりレおとだろうがおちるア。け又新町の子劇や

のかびのちょめぷ。又しそもそこぢくを組屋ぐうけゐまるア
ぐるヤイおのやゐア。指ものの小せぐれぐろぷどうやでさろ
きくくそ。ゐだろうのんでは。コリや高縁をもんな
ふ。まつまくめうありてい大うこの町のお安ぐころの
ぐうそうめぐ仕ぐろぷ。コレそうもうの奴めん。新田くう
くるゐそどんの墓ぢるぷ。ちゐのなんはそうつ化ぷぷれ
でもこんどで大きくるうくぷ。ゐ本性ゐうをいぢめうぐ
うふくそれめぐうぷ。ちもちゐぢうもちゐぢ刀化で。

きのきうこうァびうろ
もうしをそうがなもらけへも
やまァ秋雨まこ　むすこ　そんこうァ
そふぶうけひゆくふゆうちやァ。おんまう柄が
ゆうと　子共　ワアイ〳〵　児　ま
ふけんさうなのおまうう。
うう〳〵　ひうふつくえ
ぶんこもうひうさづけ　子共　アイ
お仲通さう柄な伯父さん

おいら〳〵ひゆく　き　ちりやァうんのころ　子共　お陸中と
いつこと〳〵　き　おきやァがれぶ
おやと　きうふこんこうァ。　この
よござ　うんうんがあ。　この
ふうこうこうをしてそのこふまま。
ふうこうこうをしてそのこふまま。
むをそこぶつきのう。　あこ
中のうんやつぶ。　ぶ
柳田のうちぶ。下の

なみハなんぴゃうあるきさまもやさしいあんばい
ぶおいそいでおまへのことがあればこそかりにもしぬるとハ
こんなよ波がワアイ〳〵トざんぶりうまることをもうざまろ
ばかなことをもうあげそうるそこのいのちをそまつにおもふな
まへとうけてもく[元]うさんおそのの病気のやうすをくわしくはなしてもら
ふでござりまも。姉さんのことをいろ〳〵とよくいつてきかせ
まもと[方]さんもあるワアイ〳〵[やと]イヤさんぎろ
ふでまろこと。ぶ合ハふおねまる中。それゆへアノ

ろふんそれでハ死よといふのあげ。そ〳〵とういろ
もろうち人多代ふさうつまろうんそまてお松が旦
へのお使ひをとうてそうまを聞ふやういふ
ぶんな夜更に昌のるふし。もんの病気。
いろふ今生苦ふせまれば。そんそんそ
るとそふとなきく〳〵お松をまこれろ。府。お松がよ
まへとうとそとてもそのあるりや
いとしまも奴ぢ妹ぶごとくぶのようにあるこ

がおるとても。ごうしがよ〻みすみ〻てござりまる〻
これじやの〻の。それ文。ぞなるさと若衆（くがい）と申〻
まづめでた婦め人（おんな）義理（ぎり）がたて世ぬ。ごうしがやまひ。
るとうひでも大（ずい）るゑでござらぬ 信 それでもおまへがびよ
つとめしめのことがあつて〻ごうしやどうかきそ
おめんなまと やと イヤまづめ。つてぞ死（し）ぬてじやるい。気
ばちひしめんるト。ちひらみなそござやそれお人だ。ちゝさくいとう
おてがをされ。しとやうしきまようくどそう
アまり〻。おや をとがきなさる
いまゆよ目をつけて 吉 ヲヤア せんどまで紙帳（してう）をと。う

ぶりてゐろけが。コリヤ何所（どこ）じやらうおんなりのもと。ぱたん
ばけてきて〻沖（やぢん）郎のるゝぬ やと コレハコリヤしがるのそれ
とらん〻むてゆく。〻おうしさるがかりてゐさうし 吉 ハツ
あら（まう）いやからずがツリヤアきつくぢ。イヤおれはおめきが
病気（びやうき）をとるまでるかきのどくじゃが。〻しもおほふようる
〻まづ〻へ（ことを）らぬすまと やと どうくへいしゃ 吉 極楽（ごくらく）へいふ
おほ 浄へいきこまさと生れた者はゆるして下されワアイ
ト大ごゑあげてうそうなるぶんのうちでもあのいのちが。そくそくぞうい
小猿うちさんでも二三百ハもつうきんでもひくちやらんそ

これんとの
めくさんへ［やど］コレ〳〵どうするのだ［き］あゝきさまの手まへ
面目(めんぼく)ないが下(のりも)のだくろうが亦の娘(むすめ)とちゞまろましし
しくが因果(いんぐわ)の浅くだひしよく縁(ゑん)がてんなふなりて。
死ぬの生(いき)るのと致しろうるおろそうかわらくわが
なし。そしも男女是非(ぜひ)二ツ三ツ分もぞんざいしてゆう
経べもなんだよっておてハなし。ろうそのとらびでも
ふって手こ縁よふっと相ひきをハ[ママ]く［隠］ヨホゝゝゝ
［き］アてこのがきやア緒をおとしやアがるへのてころ

おきおしアきなしくてく［やど］ひきしハめんどうくさい
てもこうちやめふるんかもなん［き］アてこるくすそぞかそん
るとくそ出れんどのだらうハわんとうでござるハおよがいとみたえ
ど トおろくふろてめんどしをまぐし。ちよつとえりへひつかけておゝ おみやをおびと。むすをびあハせると。おゆハおやろれこゑをかけ
［やど］コリヤろみ木そしおる［き］くりすてたへ［やど］アてたのおのれ
がよりなるうけハたんぞ［き］うろく部方できそう分ト。
なろるいど。だろしもこまけもつえへすせよあゝきさがよ
トがんとらびをあらふうる［やど］コレ〳〵何をしやある トきもそらぶせへおるなくも らけようとおるもみつき

（アゴぶしく目をまはろ気ヒてのどをしめ）志 さんまして やど だいぶあよくきこぬる 志 よし
ふしても今がるいそれよりも二て工分りしてらんさるなるぷ死
ぬまへのだしやせう やど 十二三時ちよるふ平気ら様が 志 うれへ
あるまいが。そのらいまれ 浪 イヱ これへせろく伊左さんが
まつてきて下さるこそのを 志 そんなにならんまして トうかを のろくは
しとあぶく。おまへはまこ ぶらりよれはおもひなが さと ヱて おの也人の志へとなるいゝめつていきや
志 きのどくらろをせて下さん。おしえおぼよめ川で々るふ
浪 それでもうてきん。おさるむろろ 志 ヱそござゐつてもつりれアノ

八

伊ぞうろうわが父どくうちであしとおぎござろふ。ぶずんでもあんの川
やれおうまいとそを川てもちつるらウ あ魂き。そんなるしちろ
とのまがり。まずぶ気 トうちまち重つくりがのらい まえとひ川よってきふうちらけぞうくし子出てあれ
志その入くちのそくらのらぎべらいまなをひつらけ 志 ヱていめへずしん。くでの入口へせまくて。
これじやアあ魂きが志んでも握揃が出るいゝ人 浪 アレす
そんなにきふかりることを 志 ヲツト あやまつてそんなるゝ出く
はゝゝトよくちょふろうて出て引ちがひて入ますれどしの比 次の口めのおしとくいろドろやして ひんまりくしゝろやさ男かやも
多どりのふて君ハ 伊ぞう らうさん多どの何や何ぐしとらかえ あきさんどの
ひとりむきを子やうらつふおさのうをつらひまてとをずんでじとのてあよて。

なまろてこ。ぞ。ぬあうちぐこりこ。ろてこ。ろんなこへ。お
ぶなさるまい 伊 ぐこぞせあてこ。おりくい仮くなまろてこぐ
さんませ。ぬふこうはござんすこぐ。ぶし
ものこぐあてこ。おこぐこの仮なろやそて。
それだろうぐトまぐんてこぐもぐぐ
こうこまろーもりこぐもよ
ろ国こうちまこぐ 伊 そ今なこぐこぐ。ぶしろふまるまへ多人
ろちぐその財へお治さんハしろて世経とちやこく
あれもあるこのよろまる実のあるおこへるこてもう

まをこうこ。ぐこぬぐこれハひこくよ
もんこ 伊 ぼうこ 西和さ 宝 功左
牛の牙の外ぐあうなぐこ。おるこ
十卅 世経よるろうこ。なこ。ぬこうもるぐこ。
ドレうてぬくやせう 流 そよふござんまを 伊 まこぐんみ
きやせう 宝 さまこうるこ。のちぐ
こうこれは世紀伊こぐ人 ぶなこぐ人はそへせこうりくこぐ。
りるよ。ぬこぐ姫おるこぐ。こうこ
まぐ
ちこしき牙をまをぐてそこぐ。姫もまた。男なぐぐ
んふおりくよ斗ぬてまぐ。世るこぐのおぐぐこる日。ぬある牙ハ打

○第二回

日(ひ)くらして井(ゐ)の中(なか)へ跳(はね)も宿(やど)るる浴衣(ゆかた)寺(でら)のひとつ灯(あかり)

と涼(すゞ)しむうちひきうり。今(いま)は海辺(うみべ)が原(はら)よ咲(さく)。

名(な)どころ芸者(げいしや)の素人同然(しろうとどうぜん)拵(こしら)へ

倡(しやう)ろおまさをはじめとして。色(いろ)々(〳〵)の

うるさい入船(いりふね)や客(きやく)の出船(でふね)の揃(そろ)うて汐(しほ)のうるさき

うらもなく笑(わら)う現(うつゝ)をも祝(いわ)うんで拵(こしら)へる。う紀世(きよ)の人(ひと)の夜(よ)の

おぬさとるもおれべ逸(いつ)もあり。

さゝ〳〵よ。半(はん)男(だ)のそゞくようるもちもち

まゆげ。只(ただ)おりひの大(おお)い狗(いぬ)よ絞(しぼ)れど。飽(あ)とをぞてるも

いまさら。今(いま)はさよ。もけむをめよんへおれどぞおや

ちぢ。ぬ〳〵よ。ぬ〳〵おりて。云(いふ)もべ。弥(いや)ぬ〳〵ぬ〳〵。

ゆんをよ。今(いま)ていいざる内(うち)そのをるべ〳〵。そゝおそめるとこ

ろへ。つゝ。ゆきをう。母(はゝ)ゆうゝ病(やまひ)。

とろへ。つゝよ医平(いへい)の弥(や)〳〵。秋(あき)のみ日(ひ)せの夢(ゆめ)ときへ。みるおろこ

が。魅傷(みしやう)八日もあそ〳〵れ。ぬ〳〵。伊(い)ぬ姫(ひめ)のうゝをを

こゞ。縁(えん)や。ぬる名(な)をまろう。葬(そう)送(そう)をつるこそ。俄(にわか)あ〳〵の

うざい。きんす。おぬ〳〵そへてこ〳〵せ。娘(むすめ)おるこゝをめうひうけ。孫(まご)ろう

二世(にせ)のちぎりそる。やゞそはゝ。江戸(えど)のてをやゝ。病気(びやうき)のよ〳〵ゆて

迎(むか)ひの飛脚(ひきやく)こゝをゝ。ぬ〳〵。そうれ。ぬ〳〵。ぬ〳〵をぞ。

[illegible]
[illegible]
[illegible]

うぐぅもありやアもせん 兄 こアもろこぉお金たこぇ
なんーる 伊 りんくうやせう 兄 ごでぇ今ぁきてお
うんるんー 伊 こてのきぃぜひてやアるう初へるがある
兄 なぜん 伊 おめんやアん大分関がある。居をうこぇごうり
てぃきこりのもあうぅ 兄 うやいみぅとへ 伊 おめんのうち
ぅ 兄 まぇこぇこうちやアいるふ内へおぎんせん 伊 それで
もぉおめんぐよこてぁもうこぇ。お国ぁうるかもでめてぐぅ。
こぐうそおぜんがごぅりやせう 兄 ぅいみぅとへ 伊 おめんのうち
ぅ 兄 まぇこぇこうちやアいるふ内へおぎんせん 伊 それで
もぉおめんぐよこてぁもうこぇ。お国ぁうるかもでめてぐぅ。
こぐうそおぜんがごぅりやせう 兄 ぅいみぅとへ 伊 おめんのうち

をうこぇこぅんをとれぐぃよぅ 兄 うやおめんへトびうりして いこぇぐぅ
とうりおーひぇきこんそ 兄 うやおめんへトびうりして いこぇぐぅ
あうこうろうひぇぐぅとりよをぉうぅ
とうこぇてぃひりうこぇそぐぃよぅ
そぉとぉもてぇぎょトひぐぅよぅ
かむりんへでぎぅやまそ 伊 うイさうきうぅ 兄 コンヤ
あへちぇのあんへとぉこぇぇ
ぐぉいこぇいせう 伊 ちやアのおとこ
ぎんもう 伊 まこのあいぶふきやせう トは内まんぐうそ
いこぇおりそ。そぐぃよ
まりをまてぇぎうる 兄 いろおいぐぅたんま 伊 つぐうぃよぅ

トいつてそゝくさと出かけるところへ里吉もきて〳〵して
来り。おさへつれだちてゆくとおもひしがやまひにかゝる
家(けま)や後架(こうか)のこうれんパタ〳〵で加(よ)うきかのあたりにけそうる。
のとりわしき。死ぞのちしぶの下までおとり。むめのかさがりて
何とろく。ろく替(ろく)こしていつのろが。わどろくすじくのおちる。
犯じもりつれ乏くつるふ。そこくのいて毎ごとしてやがてぶし
きん〳〵り。火もなれ大きちのそぞふつく〳〵ぞひ。神ち加のひおへ
げゆうりむ死て。灰(はい)くれなりしめる所へ志んぞう夕凪くけて大入
[夕] モシエナ今のきやく人が。丸とつきとれるさんせうしこ ト
伊三ぶがうて入
とつてきたる
[花] 今めくしてやらいせう。ぶれでそ子どもを
よんでおくんなんし [夕] アイ トウぞうさとをいてゆく [だんしん きうえもん] おめへ

十九

さんがとあんどそれぬさんせう人 [花] コウちやア稲いりそ
きのどくなことといつてしいつこ [初] なかまと人 [花] せんでおめへ
さんおもちろすとつしとうろちが四手のりてさんのとて
とぞうさわしておんなんしこおりるていつゆかべこそしや
ろうまでさしくて。お人でおざりのを [初] きや ろんおへ [花] アノ
それとこうちやアきついせんのんざんとうゝなさきまで
ちつちうふぬてぬしひとう稲りしてふやりとがりつそきみ
どくでおりいせん [初] おめへさん又ちやうつともつてあゆげ

なんとそやってよろこぶ 兄 十二才 いくつでも其夕さんが
おさなんをとゝ。むすこ(こ)ゆ(ゆ)ふべもおの
ようよう酔てゆをさそ夕凡さんがおこーるん
とゝ。ひつくりしてあつちへいこう〳〵ごそ
そーとまるんさこつちへ神さまのおつなんをゆう
とりもつこーくごろうこをとこーてそんせる兄
こゝ。そばでびつくりしてをれこゝいこゝをきよと
ありつてる内。こゝやのむすめこゝろて

おとうなんこゝごゝふうそこゝでもこゝ
ゆえんをとゝ。ひよこと兄おぎうゆきなんせんこゝ。
大勝
てんこゝ。きのどくなるまゝごやゝおざんせん。ざいこゝそいやうこ
初 ふこゝでもおあげなんこゝる 兄 ヲヤざんこゝし。いこゝうめそき
前
きあつこゝあんよ。そこゝやのめこゝもおざうりをとゝる。トおざうり
いこゝとごうありまそ。そのをまをおこゝんなんこゝト
さこゝうこゝふこゝをもこゝてゝ。伊こゝそごうこゝをれてゝド
うこゝんの中へいれてあこゝけ内こゝそこゝ
さんあんこゝ紙入をとゝ。おこゝまれなまつこゝをよごごゝれきを 初

今ありてやろうとおもひ
ことふるさとゆるり
のみうでござります 兒 そ
あの人や 茶 さゆうでござ
いまり
男さのりうへお出なさ
なさそうでござります 兒 いる人いうりゆ
何処
どうへまでいうもろうへ 茶 コレハ又うれさうめのお給
まず
兒 コレいろうせんよ 茶 りゝ

そうのりてやうせんおもちなれ
とお出なんし 茶 うとまろう
○第三回
兒 さうふ月の遅る兒をおろくる好ご事ちこと
兒遊の兒いさもあるべし
級ぎさうする性の強い仲の町あひも荒
山よりの新もおよび処
孫ゆへこまで居続の客人ちりる

のそでやいなー。おまつ「あそこのちゃ
やせん 兒 そりゃアよそのちがうそうぜんさ。りん「よ
せんどもおくさんのことがすきだよ。いろそおめえさんのことが
ろう 男まるりてまえ向うへ物(ぶつ)とあげてもまだでござんす
う。紙入(かみいれ)のうちへ入(いれ)てあげやしょう。ほろじいーさん
伸 アイそれでもあのこれ申(もうし)ー。それ兒(ぼん)ホレ二
よくまてまんさんのみだぬーのこもらーく
いりてもりいーよ。大きよおせさまなりいーよ。おあり

がとうおざりやす。伸 土井せうとーこらいよ今ごのさて
でもおぶおーろう病気(びやうき)。叔父(おぢ)さんがおのまうのお
まろうのお。おまようのるんようまっそのて向(むこう)の角(かど)のお
茂(しげ)後あのてまるりてまんどぶんのこまき 兒 いろそめーが。
おまーくしておまんさんをとらんこさんをそーてお先(さき)へ
さんぽうつとまーへおりへ今ちんぺ兒 伸 正月(しやうがつ)ろーそ
兒 てさんぽうともまるよおざんす人トこりおでござろう伴
ちゃのびやう死(しに)そうおまつ今ちゃのびやうとんひろうまりーろまでござんすとんやひげんへやひろむいてね

ろろろ。どどどのろんのきもろろず。
うぢぢろよようろひうぐぐ。兎モルゴてよぞろんすろう人 俚
ぞよもも私人ぐぜんてんちろ
きぶぶてて兄人申ーと 兎ヨヤてて
おろてころてぢぢんきのろうをむ
ぢろろんのさゆとととぶろろんでおき
ーすうんへーさ。きもう 能 ようの酔とととまるをろうでなさろ
いをトようぶうまてていは伊ろぶ
これものんでむ私をきもう 俚ろんようろぶ。ぞよう
これで。ろぐぜんくとろのよ
ぐろてなるのだろうかりて。そ

のよなんろるやいのととめへちろ
ぶれよ汚ぎきめ人をろ。ろもちをむでろんとろなか
よんなんー 俚でぐぶのよう
ろやりよやいのをめ人 俚おろとも
兎ソリやアぶよーてん人 俚ろもぐ
はろへぷそろるろくさんかひろう 兎ろん
おみくろぷろをれへの。ぶきも
おろこれをんぐ。ととまでもさせ

はなしてきかせる　兒　ねんねんころりでおぢ
いさんをねかしつけるまで。おばあさんは。
ろうそくのしたで。おせんたくものをたゝんで
ゐるところへ。あのよめさんが。内(うち)から。ひとり
で。人ごろしと。
ゐてこゝへあるひ。おやまへんだうをとほつて
せう。ざんぎやくする夜(よ)がでゝ。ゆきの
のうへに。ぬぎすてゝある。男(おとこ)のよふな。夜(よる)ぎ
いおざんせんよ　伸　おるこんだ。ろうそくせ
きまぶが。おやまへんざんぎやくの
くのさ　兒　ちんまそんなん。いおざんせんなどんで来

ちんをおぢいさんとぶ。ふるぐ〜のきものを
きた人ととるなと。ねぐろみふかそうせてをろん
まの夜(よる)ふかいせんを。孫(まご)もあるお祖父(ぢい)さんで。
ようんとそとうよものせてをろんおりてんぶ
なのへー　伸　そんなこゝへ。おやまへんだうをまや
ちやおーしてまへんなをまぶ。今(こん)ろうそくも
ちでもぬーるまぶ。ろうそくもぬーるまぶ。

伊 土井 ろんでも神くとそぐ。ぐんよろそぐそぐあるろぐ。
おれよろそるるぐある 尻 ソリヤアきろつとろろいしゆう。
ろもちをめーとあんくあり いてろろいてもめ。あとでろひるんをくきこいせん
ゆくドレをとまろんーゆうト まろろうことをぐこそぐ
許は回をようろ実よ人とろ多く
てのもふか送よ今ともあり
深へせめこそまるべー。今
実ろ人いよくめてをとろの悪い縁

慎るべきの一事ぞかし。假令
死を免るゝとも務めて
その品を賣とるべからず
同じ
或人のいはく
さるもいろ〳〵
依據のうそもまことも
そのまゝさどのきやう〳〵

○第四問

鶏をとるの術をとはゞ

飲食の害あるを治が今の役も。
むかし猟る者男ひ。仔三匹が母を
奴敢て殺さゞる色ひられ。
くまく男ひ羽のをしのみを
仔三匹母狀ホ列ねて
が情ホあひ孫ホ紅ホホ
宮ホ傳ふ。ホ
ろこび。彩メ化ホ
ゆへをもくゆひみゞら格ホ
拾〳〵れその子とよをべき

ばりうしこの病となりて、伊こそが母あや芸尼よ
あのおみこが祝えよよろこびて
芸尼「まず伯さんのおもりかとのぶでこそ
やう奴う「お院」まづ伺も。くべうへござりませぬ。よあるこ
お伴こおもさるまでも。そうとおりでも。そうと
の病もがてらうみかつて祓これまでも。そうと
こよう　ぐぐい　もんなあ　あなど　いりん　さく
ふ事も。戻あるまい女郎しく侮つて。ふつ。ぐ見ぬ入よ。
ひつきまう　こくや。
事を。底へ捨ハが伺もうもし引こけていれ。こそ。そうなく
しぶん　きよおん　かうち
式も此度。よくくよひとこまへ。ひとこ
ひ

ふりもせざ。こまりてこともを。ひこーが苦るも
そうこの病も。そうその伺ハ。
たら
る事のゆへ事ぞ。その女ゆくる。のあろう
とうこうて尻のまをひへ。
ちり
ん。よくらうてなりまぜ奴。トなごそうく。伊こうも
ふこう合して。婦のおいそんきさ
ごうよ。ようこうも女おやこいろ。ようそ。ようこうも
ごのとどんざのおるこうあまと。ようこうもいろことといざよがいの
こうびーてるとこうこうめいてごくの
これときくくびよりもいもと。ゆこるひ
もうこうこと。ごつくりさゆでぶこうまぜこう大うこおらふ

ぬのでござりますとひろく夫さへ嫌ハれませぬから
嫁と申すが女房なれバ。さてどこへでもまゐりまするにお客に
だろうがどうかものゝはぬことしが女ばかりかうしてゐたらう
でおるさゝかてなふくもらるゝがゞなしくてまりませぬ【義】イや
夫婦ならし一代にふたりあるをもつとも十二きらひせらるゝので長楽
あれが中きひとしがおりにふ。あんまりそれとが勝様を
ぎる。ちとゆるましくいらでやされ【流】おのひよおりがおつと
のこゝのちへいくさしよ鉄丑へござりませぬが仮にもやまんさ

三十

ござりしいるかハ。女のかゞの。こゝろてござりましてそれゆくるい
女どもとめし。あいそうをはちさせて亦にはよの左右のゆいとして
【義】イやくそ娘がるい。女と云る所七ツある中に悋気嫉妬
ふられのゝともさるよへあれど。そ他ハ夫と大切にふさふく
うし。女の愚痴よりやんき嫉妬もさるるゆべ。男の心やう
であるなる筋あるゆへ外の科ならぬ女房とさるほど
のるやうしく。宮咁あさらへしゆうがおりしゆつとのことぞ。人
それで繰てが。そのよふな殺してもとしが居れべこるさの

背きし妻を捨て漸〳〵と女郎を引まはし色に心じやうんせんばなれば
音連も絶て我に縁るべき友のなきがおもひ思ひに過る事なれ。
命を削る心地して安楽に過しがたくなるなり
容貌まづ座敷に捨ひとりぎるきやうびやくは色情なれきよう〳〵て
きんぞうふうの浮跡をわすれずあとは後ほどの噂と見栄て。
しんしの糸を手中に忍びものがりのおもひ。立かやめる西施が浮世に
虞氏が海棠の雨に悲されて。鳩がまでよそ桃花のめぐく傾城の
の粧もむらさきも楼女の色に染ぐる雪のおりてはなろ
狂女のこぶれからぞろくとおりはなやめる手風流で新しや
うち女郎きしよりて

［見山］いかなと、好き男とおもふ人のそばにして何事と云はなれきと。
人の目がつくいだらうりは。又おきて〳〵入て狂ひをとやいせう。
うけるまへ拙ゆゑべ甚しきんがはんおもふ人のひとりあらずそらぞと云て
おんなりなんしとそよざんさが。それといふもおんなりり修三
さんは。帆とられあんきをゆへざんきを内証でも女人のものと
噂のあることもよそのやおきんなんせんとてアおざんをあるよ。
今は身の法まりはなんにせうとおもひつしてそれがよい
ちやアくらくぎんきこれからは気づかひなし［見修］あんまり甚さんが修三

さんのとこやうまでくらいやんて。アあ人ときれねへもん。
りかとめてもりやうりやうきもちのさんが来ずんせんとみよ
のほそがうのようにもろうてねんねやうやアと
なるやど。あれやどおもりのこをねんとさこでいやでおざりの
あるて教えのこもでき人せんようなりまを。
それやア内外のめんもまこのこれせんどてんぐんのようい
とこやアおざんせんだんとうんぎう 初丸 とうもちがやいのとこもとうこ

新枕
こうつちやうてあるこんでくらんこのろそこもちやんまが。
せんどもを夕さんが来さまろ時仕をんのようまぶろ
うねさ高で。ろもちのざ紀ぶろうきやんせん
りんざんまちんそこうりて。おりんうんしこそりく
のこ。だうろもちが教えまげろうに仕のべせんて
来さんくのとのんなようそでしてんて。
そまちうとうちらくて父のこそくおや。ちざん
せん 紀文 ろもやアりぶこをまりうこゆ。

で。二タ月しこうれ。伊之さんが まかせんせんよみはおなれし。
それがおめへさんの脱の為ごへんを 山 なふうはかるあのかた
伊之さんの見ばんなさらう。此間でよもやまゝらい。そで
ほきんぞくにとし おりいのふんしまやア。此しもそうア よち
りへんもへうし 花 りやアしまらうがぴてよくはかろしいす
ト 志がう目をあうおらめの目なれをてあら おもこが今そのそれ
出んけぞう取ハ為しに発中をおへト でけをもしうむまう入国と
てむんのきがは 丑 ここ 竹田やしぱよろさんつりしてあっくし
おもうこんぴの
ヤ てめへうむしく 初 今まめるならなぱカア おらうんるを

みさしておいでなんしぱ。コレ たろうせやアし。これ見へるとのって
きや。花浦さん名世紫を出して おくんなんし。ト ちかしみあさむ花
ぞのをぱむろはきをめて あさくさせぞそくるよ
えつくろひ花出んとあろうへ。又こくのかの 孫八 伊之さんがお出
みさりそと。こうし座しんがまゝりまし 花 初花さん
きらちへハ竹田やへいめかいまる。おめへさんいつておくんなせ
初 アサ それがコロふざんを。ニア ちょうともお出なせ。コロち
がさゑへは所て伊之さんのやうい。よくふしておきいせう。
おあんどなんさる ト むうはらずるひそけぢやく 出かけてゆ

稼なく竹田やの客主いくたいざ来てござる内、例の
酒宴もする筈も納めべこそこそ座のお仲
こそこそ。そーざこそこそきよ呉ひこそこそ
呉でのいこそ安のそこそ尾丸はくろのそこそおきこそこそ。お
きこそこそーこそ尺膳いこそよまこそ呉
こんや
伊示 今夜ァまこそこそこそもこそ
きこそこそこそふいこそてあこそこそ
こそこそきんがこそよーこそんぜんこそこそ 伊 ござふせ去ぬ尺。佳茶 もんな
るござふとおりこそいこそが。あんまり 飽 よふござやるぜ 飽きる

あんまりちゃの稼くよふござんを 伊 まめくまでもち
がこそう 兒 イエ 伊 きまようこそこそこそこそこそこそ
がおろふそれそう 兒 おふとけんおござんせん。モ文さんの
とけぬくは 伊 いよくそれできるのう 兒 ちゃくと
ござんを 伊 おなごじ尺べつおるこがやさしい
こころくいよこそこそこそ炭毋のまゆやの内のつのよる茶
うのといふそもう。奴ちゃござきれこそこそ。よふござこそ
今年いのござのこそこそござ 兒 りゃァもんよふ 伊 そ

うそでないせうこう。ぬぐ〳〵とまるで
まるうめぐトるそうぐこうそでぐろうこうめんでうらのそこもち
みそぐ。そうれみぐ〳〵まるでのぐうろくるすのとうそ
そこでありおてこうくるとめ
いうそいいちぐまいぐ。ちまくく〳〵
ちし
馬うう今うりちうまうぐ稼ぐ
うきまうまうまでなうう
あふうきうそ
まそうトうちげなけまい。まうく
まうりて 兎 コレおまもちなん〳〵 角 うぜうある 兎 りみく
いうまのくとおりんでも。ぬしの今の一云でいうぬるぬそ

うけい。これとうんでおうんなん〳〵トうぐそぶくろのあうぐろう、
みこ仕うそありひうき。 兎 コレおまもちなん〳〵 角 うぜうある 兎 りみく
うれぐおぶのあるまた 兎 コレおまもちなん〳〵 角 うぜうある 兎 りみく
とういなれしさぐきとんぬいおめくさん妹とう父母よろうてみ
なんまとうとなぜうろちよおろうおあ花こそれまもうそう。
うくぐんなゆれておてぐれ死ぬまるとまぬふ
もぐこ
利牙ふう収奴食理そ
ねーあんうまもおめくさんいうこうなんそお泊ぐみこで
まうこぐそでめて今日うの教をもまうぐそうこと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おめへべつこうなれが悪性（あくしやう）だ。が浮しちつまめへまでとつき
あるところせるのんめんしや【苑】おめへさんゆへまつさんならいい
浮しひらもいゝよかんなおざんせんが。なのよふなすいこそ
なまらしねへ。ぬしはゆやすもあらいせん。エヽウもうちやあし
うつ浮とめ承あいせん。不勘（ふかん）だがおざんさらふとゆうると。
どれがいゝ身でひざんをも【伊】すろさ心安（しあん）さも立さんるで。手
めへがひとつとござでさるし。又お浮めも。ころでんへさを狼狽
と一めへめんでもまるい。モウ称んもまづらるう。やがてめでたく

ほんまにさこあんせるを。あのしうち浮しとめてしや【苑】
それでもぬしとえんをきりてがふしそれいそれいれい
手前【伊】おちアいあんなさるといふ不敬向（おかてむき）への縁（えん）へきつく
まそまおろく【苑】イヤしそないなんすることれんがめでたくて。
四月ぢうんのあやまるれとぬ。よそもく、でときいぬやくつとし。
ふびんとおもいてをさんあんし【伊】ソリヤア身めへおれふも
死ぬとふところおふくろのきもあるとても。それでの髭（ひげ）
とおもあひつくろうしふあれが科（とが）お浮し丈夫なるろ

やせおとろへてみすぼらしいさまなどいふ。今は日のさしよりなどいふ。

伊 そなたはいつもおなじことばかりいはしやる。

おれもあるいてお酒がもとでこんなやせかたをするのよ。おまへどうぞ女をこしらへておくれなさいまし。

こんなやせかたでもかまはぬ。ふとりが中

伊 こんなものをもらふとは。

見 きつい御ふるまひ。

見 こんなものをもらふとはいつそおまへとは縁をきりたいわいの。

伊 おれもおまへとは縁をきりたいわいの。

若者 ハイ、おむこひでございまする

きよく。そもそも悦ぶるものは羅よ針を包て兄と訟よ負るが
ごとく。勇気弥増〳〵拂よう。注分よ迷惑の情を移し。
あまつさへひるよう本ちおゐ遍てまも女をうつ
ちゃのごとくなり。頭よ手脚と駆まとよやるはもなるが不云
の悪縁晴中よ香を拂ふ。さ白よ公をうがち。遠家の人
そうくる。不淘のろよ奉ふ。
例性おそんべおるべうぞ。天理の正務をうしるふ
後爺うゆづうよぐうめ

二郡意家地大尾

後篇 傾客晦日月 一九著 全一冊 近刻

青楼十燈会之記 同作 同

当時名ある妓女一統の生写一部ずつ各自筆の発句并狂歌おのおの一句を附添十遍舎戯作の青楼十燈会之記を巻末に出す